12回連載　エッセイ　第5話　「守愚を貫くべし」

徒然なるまま

安永暢男（元東海大学教授）

7 年後の次々回夏季オリンピック・パラリンピックの開催地が東京に決まった。ここ暫らく大きな国際的イベントもなく、経済的にも長期低迷が続いてどんよりした雰囲気の蔓延していた日本に久し振りに灯りが点った感じで、誠に悦ばしいことではある。但し筆者個人としては、東京は 50 年前にもやっているし、震災復興や福島原発の後始末が最優先課題でオリンピックに浮かれている場合じゃなかろう、マドリードも 20 年前にバルセロナでやっているのでまたスペインでというのもどうか、という消去法から、東西文明の架橋とされ、イスラム圏初の開催となるイスタンブールを支持していたのだが…。

IOC 総会前の直前予想ではマドリード優勢と伝えられていたのになぜ東京が勝ったのか？事前に 50 票獲得といった情報が流れてマドリードへの反感が拡がったためとか、次期会長選挙やその次の開催地への思惑からヨーロッパの票が東京に流れたとか、色々な裏情報やらプレスの分析やらが後でマスコミを賑わした。東京は最終プレゼンテーションで点数を稼いで誘致を引き寄せたという見方も強いようだ。筆者自身はテレビで断片的な映像を見ただけであるが、確かに国際スポーツ界に顔の広いという高円宮妃には日本の皇室にもこんな気品を備えた方が居られたのかと感心したし、被災地気仙沼出身の佐藤真海選手の決して流暢とは言えない英語ながら明るい笑顔とその真摯な語り口に感動したし、ハッタリというか大法螺を平然と吹いて放射能不安を一掃した安倍首相にもさすがエライ政治家は違うと唖然とする程のインパクトを感じた。プレゼンテーションの効力を最大限発揮させた演出の勝利と言えるのかもしれない。

我々が身を置く学術・技術の世界でも、得られた技術開発の成果や製品情報を公表し宣伝する手段としてのプレゼンテーションは極めて大切な活動の一つといえる。所属学会の学術講演会における口頭発表も大きなプレゼンの場であるが、最終的には学会誌・専門誌への論文掲載が最も重要なプレゼンテーションの形と言ってもよいだろう。複数の専門家による厳正な査読（校閲）を経て掲載の可否が決まるので、ハッタリも大法螺も通用しないのが辛いところだ。

このプレゼンテーションが何らかの形で外部機関から評価されたり、更には表彰されることになれば研究開発に携わる研究者・技術者にとって価値あるステータスとなるのは間違いない。ノーベル賞級の評価を目指して頑張る方も中には居られようが、当面の目標となるのは所属学会の論文賞の類ということになろうか。千名以上の会員を擁する学会であれば、年間数十編以上の原著論文が学会誌に掲載され、数十人の専門家による厳正な審査を経て総合的に最も評価の高い論文に授与されるのが学会論文

賞の一般的な形であろう。“当たる”確率数％以下という狭き門である。オリジナリティも高く、有用性も十分な内容なので論文賞がもらえてもおかしくない、と著者本人が秘かに期待してもなかなか“当たらない”のが現実であろう。

私事で恐縮だが、精密工学会の論文賞ともいえる「精密工学会賞」を頂戴したことがある（昭和 60 年度）。レーザ加工におけるワーク表面でのレーザ光吸収率の測定という地味な内容の論文であった。これは、ワークの表面粗さや表面の酸化レベルによってレーザ光吸収率がどう変わるかという実験データを収集しておいたので、折角データを取ったのだから少し整理して論文にしておこうか、という程度の軽い意識で纏めたものだった。著者本人としては、データの在庫整理をした、くらいにしか認識していなかったので、後日学会賞受賞の通知を受取った時は一瞬何のことか理解できず、暫く戸惑っていたのを記憶している。基礎的な内容だったのでアトラクティブなセールスポイントはほとんどないと筆者は勝手に思い込んでいたのだが、当時まだ黎明期にあったレーザ加工技術に関しては、むしろそのような基礎的データの積重ねが必要と審査員の多くが判断されて評価して下さったのかも知れない。これ以外にも何編か原著論文を発表しているが、そして中には上記受賞論文よりも優位性が高いのではと自分では秘かに期待した“自信作”もあったのだが、それらにお呼びが掛かることはなかった。どうやら自分の論文に対する自分の評価と、他人である審査員の評価とは違うらしい、ということを認識させられた。

一方で、論文賞の審査委員も何回か引受けたことがあるが、他人の論文を審査する立場に立ってみると、自分が下す評価と他の審査員が下す評価とはそれほど大きく違うものではない、ということも実感した。

小林昭先生から頂いた色紙

このような筆者自身の体験から学んだことは、「自分の仕事に対して自身が下す評価と他人が下す評価とは必ずしも一致するとは限らない」、「評価とは自分以外の他人が下すものであって自分の思いや期待とは別のもの」ということである。これは何も研究論文に限った話ではなく、どんな分野でも、またどんな立場の方でも、本人としては一生懸命努力して人に誇れる満足な成果を上げた積りでも、周囲は自分が思うほどには評価してくれない、という“ジレンマ”を一再ならず経験したことがあるのではなかろうか。

どうすればそんなジレンマから解放されるのか？結果を求めず、愚直に真摯に目標へ向かうプロセスに心を注ぐ、ということに尽きるように思えるがどうだろう。上の写真は、筆者が電総研(現産総研)奉職以来ご指導頂いた故小林昭先生（本学会第 2 代会長）から、先生の叙勲祝賀会の際に頂いた色紙で、『愚を守り志を移さず黙々とその真を養う』と読むようだ。全ての道に通じる処方箋のように思えるが、「守愚」だけでも現実にはなかなか難しいことかも…。